



# 勉強会講演録①

～基調講演 大胡田誠～

弁護士の大胡田誠と申します  
どうぞよろしくお願ひ致します

～拍手～

大胡田っていう苗字は結構珍しい苗字ですので  
なかなか耳で聞いて伝わりにくいようですね

電話なんかですとよく

「大浦さん」とかね、「大和田さん」なんて間違えられることがありまして  
時々あるのがですね

「あの大胡田です」って言うと

「大ダコさんですか？」なんてね、言われることがあつて  
たこ焼き屋じゃないんだからっていう感じですけどね（笑）

で珍しいケースで言いますとね

「あの弁護士の大胡田です」って言うと

「あっ大ボラ弁護士さんですか？」なんてね、言われることもあつたりして（笑）  
大ボラ弁護士と言いますとなんとなく悪徳弁護士っぽい感じがいたしますけれども  
正しくは大小の大、大きいですね

それにゴマの胡

そして田んぼの田

これで「おおごだ」と読みます

本日はですね、50分ほどお時間をいただきましたので  
大ボラではなくて本音トークでお伝えしたいなと思っております

まず少しですね弁護士の仕事のことをお話しようかなと思うんですね

弁護士と一言で言っても

いろんな得意分野を持っている弁護士がおります

よくテレビドラマなんかに出てくるのは

刑事裁判のシーンでね

刑事裁判で弁護しているシーンが出てきますよね

殺人事件だとか傷害事件とか  
そういった事件を起こしてしまった犯人  
あるいは、犯人だと疑われている方を弁護している  
そして裁判所で「異議あり」なんてね  
やってるシーンを皆さんもご覧になったことがあるんじゃないでしょうか

ドラマといえばですね、先ほど西田さんからもご紹介いただきましたけれども  
以前私一冊本を書きました  
この『全盲の僕が弁護士になった訳』という本なんです  
この本が2年ほど前ですね、ドラマになりまして  
このドラマもやはりサスペンスドラマでした  
この本自体はそんなサスペンスの要素はないんですが  
脚本家の方がですね  
ある殺人事件を素材に  
それを全盲の弁護士が解決していく  
そんなドラマに仕立ててくれました

若手イケメン俳優の松阪桃李さんが  
全盲の弁護士を熱演してくださったのですけれども  
日本の俳優が視覚障害者の役を演じる時って時々ありますけれども  
大抵の場合はサングラスをかけたりとか  
あとは目をじっと閉じて  
それで目が見えないということを表現することが多いようなんですが  
ですが松阪さんは私をモデルにしてくださったということもありまして  
目を閉じないでね  
目を開いたままで  
だけどなおかつ目が見えていないという  
そんな難しい演技に挑戦されました

実際画面を見た方によりますと  
本当に、彼はね、目が見えていないのじゃないか  
というリアルな演技だったようですね

今でもこのドラマは  
TBS オンラインっていうんでしたっけね  
確か有料放送なんですけども  
425 円だったかな  
くらいでインターネットで見ることができるようですので  
もしご興味を持ってくださった方は探してみてください

まあそれにしてもこの松阪さんの役作りって、とてもストイックでしたね  
撮影に入る少し前に我が家に泊まりに来てくれました  
小さいビデオカメラを持ってきて  
私の生活の様子だとか  
仕事の様子  
それを撮影されていましたね  
おそらくあれを何度も見直して  
それで視覚障害者の役を  
役作りをしたんだろうなと思います

一緒にカレーライスを食べたんですけども  
まあさりげなくね  
「福神漬俺載せましょうか」とかね  
「お皿俺片付けますよ」なんて言ってくれて  
本当にこう、画面から伝わってくる  
そのままの好青年ぶりでした

夜はですね、普段私が使っております  
小さい狭いベッドがあるんですけども  
そこでお休みになりました  
もちろん別々ですよ、一緒じゃありませんけど（笑）  
そこでお休みになりましたですね  
彼は 180cm 以上あるのでとても狭かったろうなと思いますが  
翌朝はですね、なんだかそのベッドちょっと良い匂いがしましたね（笑）  
まあそれはイイヤ（笑）

えーと、なんの話でしたか  
ああそう刑事事件  
刑事事件を手がけている弁護士がいるかと思いますが  
一方で大きな会社の顧問弁護士なんかをやっていて  
何千万円何億円なんてね  
そんな大きな取引を締結する  
そのお手伝いをするのが得意なんだっていう弁護士もいます

また数はそれほど多くはありませんけれども  
テレビのワイドショーのコメンテーターになったりとか  
あとは行列のできる法律相談所  
ああいった番組に出演して  
お茶の間の人気者になる  
そんな弁護士も時々おりますよね  
こう言った弁護士のことをですね  
業界的には、まあ若干のやっかみも込めまして  
「タレベン」って呼んでおります  
これはタレント弁護士の略で「タレベン」なんて言うわけです

じゃあ私はどんな弁護士なんだろうかと言いますと  
私の場合にはね「マチベン」という言葉がちょうどぴったりかなと思うんですね  
「マチベン」っていうのはあまり耳馴染みのない言葉かもしれませんが  
おそらくこれは町医者から来ている言葉だと思います

町医者というと  
街角に小さい病院を作って  
市民の皆さんが病気になったり怪我をしたり  
そんな時に駆け込んでいく身近なお医者さんですが  
私はその弁護士版ということが出来るかなと思うんですね  
ですので  
私のところに来てくださるお客さんのほとんどは  
一般市民の皆さんです

一般市民の方が直面する法律的なトラブルと言いますと  
例えばね、離婚や相続といった家族間親族間のトラブル  
あとはお金を貸したとか、お金を借りたなんてね  
そんな借金などの金銭トラブル  
あとは交通事故  
交通事故に遭ってしまったとか  
あるいは逆に交通事故を起こしてしまった  
そんな時に私のところに相談に来てくださって  
お手伝いをすることが多いです

あとはですね  
私自身も全盲の障害を持っておりますので  
様々な障害を持った方からのご相談というのもあります

例えば以前こんな事件がありました  
茨城の方にある、とある施設での出来事なんですけれども  
この施設というのは  
家族が面倒を見切れなくなった障害者を  
お金を払って閉じ込めておく  
そんな施設でした  
病院でもなければ学校でもなく  
なんのですね、法的な裏付けのない  
そんな施設なんですね  
でそこに大体月々20万くらいのお金を払って閉じ込めておく施設でした

設備は簡易な刑務所といったところですが  
窓には鉄格子がはまっています  
フェンスの上には鉄条網が張り巡らされている  
そして中で障害者たちを監督する役の職員がいるんですが  
この職員は元暴力団員です  
こんな怖い施設が実は現在、今でもあるんですね

である時  
この施設から命からがらに逃げ延びた方がいました

彼が弁護士のところに相談に来てくださって  
「違法に閉じ込められた、不当に拘禁されたので裁判を起こしたいんだ」  
そんな相談をしてくれました  
私は彼の代理人として裁判を起こしまして  
結局、裁判自体は和解が成立しました  
一定のお金を払って解決する、というような和解が成立いたしました

ですがまだこの施設は現役で活動しております  
中には50人近くの様々な障害を持った方が  
自分の意思に反して閉じ込められていたわけですね  
中にはどうしても出たい、という希望を持っている方もいました  
なので、私は何人かの弁護士と  
何人かの福祉の関係者、あとお医者さんとチームを作って  
この中に入って行ってね  
どうしても出たいと思っている方を助けたい  
という風なプロジェクトを立ち上げました

なんとか連絡をとりあって  
中に三人どうしても出たいと思っている人がいるとわかりました  
そこである時  
この施設にですね  
ワンボックスカー二台で乗り付けて、この三人を救出する  
そして信頼のできる施設にお連れして、そこでの定着支援をする  
そんな事件をやったこともありました

弁護士っていうと  
なんとなくこう裁判所とか法律事務所で踏ん返っている  
そんなイメージがあるかもしれませんが  
時にはこんなアクションもどきもね、事件もやる  
それがマチベンでございます

では全盲の障害を持っている私が  
どうやって弁護士の仕事をしてるんだろうか  
次にそんなお話をしたいと思います

目の見える弁護士と、目の見えない私の違う工夫が二つあります  
それは様々な IT 機器をうまく使いこなすということと  
目の見えるアシスタントとうまく二人三脚で仕事をするということです

先ほどテレビの中にもね、私がパソコンを使っているシーンが出てきました  
まああんな風にして画面の文字を読み上げるソフトをパソコンに入れて  
ワープロを打ったりとかね  
あとはエクセルを使ったり  
ということをよくしていますし  
今日のレジュメもそんな風にしてですね、作ったので  
もしかすると漢字の変換とかがおかしくなっているかもしれません

あとですね、いくつか普段使っている道具を持ってきました

例えばこれ、これはテレビの中にも出てきましたよね  
点字でメモを取ったり  
そのメモの内容をやはり点字で確認することができる電子手帳のようなものです  
この中には大体文庫本一冊分ぐらいの点字のデータが入りますので  
裁判の資料だとかスケジュール  
そういったものを入れて持ち歩いています

あとはですね  
iPhone です  
皆さんもお使いの方、多いかもしれませんが  
この iPhone って表面はツルツルで  
手で触ってみてもどこにボタンがあるのかわかりません  
ですが、画面の文字を声で読み上げるという  
そんな機能がかなり充実しています。  
ちょっと声を聞いてみたいと思います

ジュウロクジニジュウロップンホームボタンヲオシテロックカイジョオコナウ  
今時刻とね、ホームボタンを押してロック解除なんて言っていました  
だいぶ早口でしたけれども  
まあこんな声で、例えばメールの文章だとか



ホームページの画面なども読み上げることができます  
ですからこれを使いますと、  
私もみなさんとメールのやり取りをしたり  
インターネットでいろんな情報を検索したり  
ということもできるわけですね

あとはね、この腕時計  
今私が使っている腕時計も変わってしまして  
この腕時計は、手で時計の表面をなぞっていくと  
時計の針のところで振動して教えてくれます  
今は3時26分ですかね  
針が見えなくても振動で時刻を知ることができる  
そんな時計なんですね

あともう一つ  
取り出しました筆箱ぐらいの大きさの箱でございます  
これは何かというと  
物の色、色を声で教えてくれるというそんな機械です

例えばそうですね  
私のシャツの色をしてみようかなと思います  
ハイイロ  
ちょっと違う（笑）  
ウスイムラサキ  
まあ薄い紫と言いました  
多分これね、紺のストライプなんです  
ちょっとそこまでは判別ができないようですね  
薄い紫と言いました

あとはですねこの演台の表面はどうでしょうか  
シロ  
白だということです

あともう一つ、ちょっととある物の色を見てみようかなと思うんですね  
それはね、この辺り

クロ

黒と言いましたが、これは何かというと

私のお腹の色でした（笑）

腹黒いというのがバレてしまったというですね

まあくだらないネタでございます（笑）

まあそれはさておき

そんなね、様々な便利な道具が開発されておりますので  
これを使うと、これまでは視覚障害者ができなかったこと  
だけど現在かなりね、いろんなことができるようになった  
そんな時代でございます

もっともいろんな機械が進歩してきましたけれども

やはり人の手助け、これはとても重要です

私の法律事務所にも目の見えるアシスタントが二人おまして

この二人のアシスタントに私の目の代わりとしてね

いろんな手伝いをしてもらっています

例えばそうですね

裁判の証拠写真なんかが出てくることがありますね

そういったとき

まあ自分でこの写真を確認することができないので

アシスタントに見てもらいます

例えばそうですね

傷害事件、誰かが誰かを殴ってしまった

そんな事件の証拠写真として

人が人を殴っているような、そんな写真があったとします

そんなとき、私はアシスタントにこの写真を見てもらって

写真に写っている人物の格好を自分の体で再現してみます

「こんな風にね、右腕を振りかぶって殴っていますよ」

なんて再現してもらわうわけですね

これによって写真自体を見ることができなくても  
写真にはどんな人物が写っているのか、ということを理解することができるわけです

また弁護士というのはかなり外出の多い仕事です  
裁判所に行ったり警察署に行ったり、いろんな外出をいたします  
そんな時、アシスタントが目の代わりとなってその場所まで安全に誘導してくれて  
その場所に着いてからも、いろんな視覚的な情報を声で教えてくれます

例えば警察署に行って、そこにつかまっている犯人に面会することがあります  
これを接見なんていうんですけど  
この接見の時もアシスタントが同席してくれまして  
例えばそうだな

「彼は視線がキョロキョロと落ち着かなくてなんだか不安そうです」とか  
「彼は帰り際、深々と頭を下げてお辞儀をしていました」とか  
そんななかなか私には気づくことができない  
視覚的な情報を声で伝えてくれる  
それによって、私も彼の内面を知ることができるといったことがよくあります

まあこのように様々な道具を使ったり  
目の見えるアシスタントとうまく二人三脚をしていきますと  
目の見えない私でも、なんとかね、弁護士の仕事が勤まっている  
そんなお話でございました

さて次に私が弁護士の仕事をしていく中で  
一番大切だと思っていることについてお話をしたいと思います

それは何と言っても依頼者との信頼関係なんですね  
もっともこれは弁護士と依頼者の間に限った話ではないのかもしれない  
あらゆるお仕事、またあらゆる人間関係にも共通することがあるのかなとも思うんですね

今私は弁護士になって丸9年ほど経過いたしました  
ですが、弁護士になりたての頃  
なかなかこの依頼者との信頼関係  
これがですね、うまく築けなくて、とても苦勞をいたしました

大抵弁護士のところに相談に来る方というのは  
人生の絶体絶命のピンチに直面しています  
借金で首が回らないとかね、あるいは警察に逮捕されてしまったとか  
そんな人生の絶体絶命のピンチの時に弁護士のところに相談に来るわけです  
自分を助けてくれるはずの弁護士が、目が見えないというわけですので  
最初は皆さん大抵不安になりますよね  
中には私の目が見えないということがわかると  
「先生目が見えないんですか、目が見えなくて私の弁護できるんですか、  
目の見える先生に代わってもらった方がいいんじゃないですか」  
そんな風におっしゃる方もいました

私はだいぶ悩みました  
せっかく弁護士になったけれど  
依頼者に信頼してもらえなかったら  
ちゃんとしたね、責任のある仕事ができない  
どうしようと思って悩みました

この時はですね  
いろんな本を読んだりとか  
いろんな先輩にアドバイスをしてもらって  
いろんな研究をしてみたんです  
その時参考になったことがいくつかあったので  
今日レジュメに書いてみました

まず一つ目  
これは心理学の本を読んでいる時に見つけた研究なんですけれども  
アメリカのアルバート・メラビアンのという心理学者の研究です  
人は誰かと会った時に、その人のどのような要素によって印象を受けるのか  
まあそんな非言語的なコミュニケーションについての研究だったのですが  
このメラニアンの研究によりますと、人は誰かと会った時に  
その人の表情や外見から55%の印象を受ける  
そして声のトーンや話し方から38%の印象を受ける  
そして言葉の内容、それ自体からは、わずか7%しか印象を受けないんだ  
そんな結果が出たようなんですね

これを読んで私も考えました  
弁護士になるまでにいろんな勉強もしたし  
いろんな法律も知っているつもりである  
だけどそれだけではなかなか  
依頼者に好印象を与えることができないのかもしれないな  
そう思ったんですね

そこで元知り合いに  
元ミュージカルの俳優をやっていたという方がいましたので  
その方に相談してみました  
まあミュージカルの俳優というくらいですから  
表情とか声の出し方については専門家のわけですね  
彼が誰にでもできる簡単なアドバイスをしてくれました  
今日皆さんにそれをお伝えしようと思います

まずは表情  
表情については  
誰でも唇の端っこ、これを口角といいますよね  
この口角を 5mm あげる  
そんな意識をすると、とても好感を持たれる表情になるんだ  
そう教えてくれました  
私もこの話を聞いて以来  
特に人前で話したりするときにはね  
できるだけ口角を 5mm あげて話す  
そんな意識をするようになりました

また声のトーンや話し方についてですが  
これについてはですね  
姿勢が大事なんだ、ということを教えてくれました  
背筋を伸ばして肩の力を抜く  
そして喉の奥を開いてゆっくりと話す  
これが相手に伝わりやすい  
そんな声の出し方、そんな姿勢なんだよと教えてくれました

ですので、私も人前で話したりするときには  
背筋を伸ばして肩の力を抜いて、喉の奥を開いてゆっくり話す  
そんなことを意識するようになりました  
そうするとなんとなくですね  
自分もリラックスできて  
ちょっとね、人前に出ても緊張しなくなったな  
っていう気もいたします

まあこれが心理学の勉強をしていく中で  
着想を得た、ちょっとしたヒントです

あとはですね  
相手の信頼を得るためには  
やはりちゃんと相手の話を聞かなければいけないのではないだろうかと思って  
カウンセリングの勉強をいたしました  
地域のカウンセリングの市民教室みたいなものがあったので  
そこに通ったんですね  
ここで相手の話を傾聴する  
ちゃんと相手の話を受け止めて聞くときのちょっとしたテクニック  
これを学びました

今日レジュメには六つほどね、テクニックを書きましたけれども  
まずはその二つぐらい  
上から二つぐらいができればいいのかなと思います

一つ目は相手の話は必ず相手を視界の中に入れて聞こう、ということですね  
よく人の話は人の目を見て聞こう、というのがありますがけれども  
初対面でじっと瞳を見つめてしまうと、かえって緊張してしまう方もいます  
ですので、必ず相手を視界の中に入れて聞く  
このぐらいの距離感がちょうどいいのかなと思っています

あと次に大事なのが  
相手の感情が表れた言葉にうまく相槌を打つ  
これは大事かなと思います

例えばそうですね

私のところに、旦那さんに浮気をされた奥さんが相談に来たりすることがあります

「主人に会社の若い子と浮気をされちゃって、本当に悲しかったわよ」

そんなね、話をされることがある

私はこの感情が現れた言葉にうまく相槌を打とうと思います

「ああ本当に悲しかったんですね」とね

感情が現れた言葉に相槌を打つ

するとこの方は、この先生は自分の心に寄り添って話を聞いてくれてるな

そんな印象を持っていただけるようです

これがカウセリングの勉強をしていく中で

学んだちょっとしたテクニックです

あとはですね、私自身の経験からなんとなくわかってきたことがありました

それはこういうことなんですね

人間と人間の関係というのは、なんとなく鏡写しのようなものだということです

よく誰かと話していて、相手がなかなか心を開いてくれないな

そんな風に感じることはありませんか

そんな時には大抵、自分の方が肩の力が入っていたりとか

変に意識をしてしまっていたりする

そういったことが多いはずですよ

でそれが相手に伝わって

相手も緊張してしまうわけですね

だからもしも自分が相手に信頼してもらいたいと思うならば

まずは自分が相手を信頼する

相手に理解してもらいたいと思うならば

まずは自分が相手を理解しようと努める

相手に好かれたいと思うならば

まずは自分が相手を好きになろうと努める

そうすると、それが言わば鏡写しのようにして相手にも伝わって

自分のことを信頼し、理解し、また好きになってくれる

人間と人間の関係ってそんな鏡写しのようなところがあるな  
これがわかってから私は誰かと会うのがとても楽になりました  
それまでは弁護士だから  
なんとなくちょっと賢そうに振舞わなければいけないんじゃないかとかね  
自信がありそうな態度を取らなければいけないんじゃないか  
そんな風に思っていたけれども  
そうすると相手もやっぱり緊張してしまうんですね  
そうじゃなくて  
まずは相手を信頼しよう、相手を理解しよう  
そんな風に意識をすると  
相手も私のことを信頼し、また理解してくれる  
比較的今ではそんな風にして、スムーズにいい関係を結べるようになったな  
そんな風に思っています

これはもしかすると皆さんがボランティア活動をする中でもね  
使える話かもしれませんよね  
なかなか相手が心を開いてくれないなと思った時には  
まずは自分が相手を信頼しよう、理解しよう  
そんな風に意識をすると  
鏡写しのようにして相手も皆さんのことを信頼し理解してくれる  
そんなところがあるのではないのでしょうか

さてここまでですね、主に私の弁護士の仕事のことについて聞いていただきました  
次に私の生き立ちのことをお話ししようと思います

私は1977年、昭和52年、静岡県の伊豆市というところで生まれました  
生まれつき先天性緑内障という目の病気を持っておりまして  
もっとも子供の頃はまだね、目が見えていたんですね  
小学校に入学した時には、だいたい0.1ぐらいの視力があつたのを覚えていますね  
この頃は0.1ぐらい見えておりましたので  
例えばそうですね、本も読めたし  
外でサッカーをして遊ぶ、なんていう事も出来ました



ですがこの先天性緑内障という病気は  
成長していく過程で、だんだんと症状が進行していく  
そんな病気でした  
私の場合には小学校六年生に上がった頃から  
急速に視力が下がり始めます

六年生の初めにはだいたい0.1 ぐらいの視力がありましたが  
その年の夏休みが終わる頃には  
明るい暗いの区別もできないぐらい  
そんな状態になりました  
この時は、毎日毎日視力が下がっていくのがわかりました  
昨日は見えただの看板が今日は見えないとか  
昨日はぶつからなかった電信柱に今日はぶつかってしまう  
そんな風に毎日毎日視力が下がっていきました

そしてそれまでできたことが、いっぺんに何もできなくなりました  
本を読めなくなったりとか  
外を自由に歩くということもできなくなったり  
いろんなことができなくなってしまっ  
なんとなくですね  
自分は周りみんなよりも劣った存在になってしまったな  
そんなコンプレックスを抱くようにもなりました

そうこうしている間に、小学校を卒業して中学に行くこととなります  
私は中学校からは東京の筑波大学附属盲学校という  
目の見えない子供達が集まって勉強する学校に進学いたします  
この時はですね  
実家の静岡を何か逃げるようにして東京に向かった  
そんな思いがありました  
もう何か、目が見えていた頃の自分を誰も知らない  
そんな新しい場所でもう一回やり直したいな  
そんな思いで逃げるようにして静岡を後にします

ですがまだ自分が全盲になってしまった  
目が見えなくなってしまったということが  
自分ではうまく納得ができていませんでしたので  
自分が盲学校に通うというのがちょっと複雑な思いでした

四月の入学式の際に、学校の正門をくぐるわけですが  
この正門をくぐるときにはですね  
この門がこれまで自分が生きてきた目の見える人達の社会から  
目の見えない人達の社会に入っていく、そんな門なんだな  
そんなね、ちょっと複雑な気持ちで入学式を迎えます

ですが私はこの中学校の頃  
その後の人生を大きく変えてくれた一冊の本に巡り会いました

あれは確か中学二年生の夏休みの出来事です  
夏の読書感想文を書くために図書館で本を探していました  
すると、たまたま『ぶつかって、ぶつかって。』という本が見つかったんですね  
この頃は全盲になってまだ日が浅かったので  
毎日のようにいろんなところに頭をぶつけて、たんこぶが絶えない  
そんな状態でしたし  
全盲になってしまったので  
人生の可能性が閉ざされてしまった  
何か人生の壁にぶつかってしまった  
そんな思いでもありました  
ですからこの『ぶつかって、ぶつかって。』という本がとても気になったんですね

この本を手にとってページをめくってみますと  
この本は、日本で初めて、点字を使って司法試験に合格した  
そんな弁護士の手記でした  
京都の竹下義樹という弁護士が書いた本だったんですね

この本を読んで私はとてもびっくりしました  
私は全盲になってしまっただけで、いろんな可能性が閉ざされちゃった  
そんな風に思っていたけれども

それは何か自分の思い過ぎだったんじゃないか  
全盲でもね、弁護士にだってなることができるんだな  
そんなことを知りました

そして何か

これからは、全盲になってしまったので誰かの手助けを受けて生きるしかないのかな  
そんな風に思っていたけれども  
弁護士になれば、自分が誰かの助けになることができるんじゃないか  
そしたら  
誰かのために働くことができたならば  
今自分が悩んでいるコンプレックス  
周りのみんなよりも劣った存在になってしまったのと悩んでいるコンプレックスからも  
自由になれるのじゃないだろうか  
そんな風に思いました

そこで大人になったら弁護士になるぞと決めてね  
勉強するようになったわけでございます

ですが実際に弁護士になるまでは、ほんとにいろいろな山あり谷ありで  
大変なことが多かったですね

何と言ってもね、まずね、大学受験が大変でしたね  
受験勉強をしたいと思っても  
参考書とか問題集といったものがほとんど点字にはなっていませんでした  
ですので、たくさんのボランティアにお願いして  
点字の参考書や問題集を作ってもら  
そこから受験勉強を始めなければいけません

実際、勉強が進んで、受験する学校を選ぶ時にも大変でした  
いろいろな大学に受験させて欲しいという風に申し込んだんですけども  
まだ当時は、全盲の学生を受け入れる学校っていうのはそれほど多くはありませんでした  
そのため「今年は準備が間に合わないから来年来なさい」と言われてしまったりとか  
「安全が保証出来ないの、うちは受け入れられません」  
そんな風に断られてしまうことばかりでした

ですがまあ、我が慶應義塾、慶應義塾は結構理解がありましたね  
私の前に全盲の学生が経済学部にいましたので  
その前例もありました  
なので、私の受験を認めてくれまして  
まあもっともね、結局受験の結果は補欠合格だったんですけどね  
補欠でなんとか法学部に入ることができました

ところが合格してからもやっぱりね、いろんな苦労がありましたね

まずは下宿探し、これが大変でした  
実家が静岡ですので  
あの日吉のキャンパスに通うために  
日吉の近くで、アパートを探したんですね  
母親と一緒にいろんな不動産屋さんを回ったわけですけども  
やはり全盲の障害があるということがわかりますと  
不動産屋さんがアパートを紹介してくれませんでした  
「火が出たら危ないから」とかね  
「段差があって危ないから」とか  
そんな理由でなかなかアパートを紹介してくれないわけですね

この時は覚えていますがけれども  
不動産屋さんの帰り道  
とぼとぼと母と一緒に歩いている時に  
母がね、涙ぐんでいましたね  
母はとても明るい女性で  
人前で自分の子供に障害があるということを  
悲観するようなところは全くなかったんですが  
その時ばかりはね、思わず涙が出てきてしまったんだと思います

せっかく自分の子どもが、頑張って勉強して慶應に受かったのに  
アパートひとつ借りてあげられないというんでね  
「なんか、誠、本当にごめんね」と言われたのを覚えてますけれども  
なんかね  
自分の子供に障害があるから親がごめんねと言わなきゃいけない

そんな社会おかしいな、というのをね  
あの時、痛烈に感じました

そしてなんとか  
大学から二本電車を乗り継いで  
一時間ほどかかる相模原の方にね、下宿が見つかりました  
そこから日吉に通ったわけですが  
授業が始まってからもね、こんなことがありましたね

あれは確か四月の、まだ授業が始まって間もない時期です  
哲学という一般教養の科目をとったんですが  
この科目、授業が始まりますと  
教授がこんなことを言いました  
「大胡田くんちょっと荷物を持って前に出て来なさい」と言うんですよね  
何かまずいことしちゃったかな、とドキドキしながら教室の前に進み出ました  
するとですね  
「君が点字でノートをとるとき音がうるさいと苦情が出ているんだ  
だから君は他の学生が座っていない教室の隅に行って授業を受けなさい」  
そんな風に言われてしまいました

せっかく大学に入ってみんなと同じ教室で勉強できると思っていたところに  
この言葉はね、結構こたえましてね  
思わず教室の前で、涙ぐんでしまったわけですが  
次の瞬間に驚くようなことが起こりました

教室の至るところから  
私を弁護してくれる、たくさんの学生が声をあげたんですね  
「君も同じ学生なんだから好きところで授業を受ける権利があるんだよ」とかね  
「うるさいと思う人がいるならば、その人が動けばいいんじゃないか」  
そんな風に言って、たくさんの学生が私を弁護してくれました  
でそれからもう授業そっちのけで、大討論会のようになりまして  
最終的には  
大胡田は好きところで授業を受けていいだろう、ということになったわけですが

このあたり、こう慶應の学生っていうのはね  
なにか弱い者を見捨てないというか、正しいと思うことをちゃんと主張する  
そんな気風があるんだな、というのを感じます  
この経験っていうのは私のその後の弁護士の人生  
弁護士のスタイルを決めさせてくれたような気がいたします

確かに、障害のことを理解してくれなくて、とても辛い経験ではありましたが  
ですがそんな時に誰かがそばにいて支えてくれると  
それがどんな勇気を与えてくれるのか、ということや  
その時に手を差し伸べてくれると  
その手がどんなに温かいのかということ  
身を持って経験することができた  
そんな経験でございます

私も絶対弁護士になったら  
今まさに差別されたり、理解されなくて辛い思いをしている  
そんな人のために働こうという決意をさせてくれた  
そういった経験でございます

まあなんか人生って障害があったり、病気があったりとか  
あるいは貧困であったりすると  
とても辛いこともあります  
だけれども  
実はそれによって教わることも必ずあるんじゃないかなと思うんですね

私の場合には障害があることによって  
「教室の端っこに行きなさい」と言われてしまったけれども  
その時に誰かがそばにいてくれれば  
それがどんなに勇気を与えてくれるのかということ  
やはり障害があるからこそ学ぶことができたんじゃないか  
そんな気がしています  
そう考えると  
人生って長い目で見るとプラスマイナスゼロでできているのかな  
私はそう思っています

そんなこんなで、大学時代が過ぎていきます  
私は大学四年生の頃から司法試験を受け始めます  
最終的に合格したのはなんと 29 歳でしたね  
ですから  
私の二十代は、ほぼ丸々長い受験生生活でした  
この長い受験生生活の中では  
もうだめだって思うことも何度かありました

例えばですね

四回目の受験で失敗した時、この時ももうだめだと思いました  
二十代の半ばになっておりまして、だいぶ受験勉強頑張ったんですね  
で今年こそは合格するぞ  
そんな意気込みで受験したのが四回目の試験でした  
ですがやはりその年も、第一次のマークシート試験で不合格になってしまいます

そんな風に不合格になってしまったということがわかって  
私はなんだか頭が真っ白になってしまいました  
あんなに頑張って勉強したのに合格できないなんて  
もうこれから先一体どうすればいいんだろうか  
そんな風になんだか頭が真っ白になってしまって  
道に迷ったような  
そんな気持ちがいたしました

この時ばかりは少し改まって、両親に相談したんですね  
両親の前に正座をしまして  
「これまで受験勉強を頑張ってきたんだけど  
今年も合格できなかったんだ  
もうこれからどうしたらいいか、わからなくなっちゃったんだ」  
そんなことを相談しました

この時に私の母がかけてくれた言葉があって  
これが今でも私の一つの指針になっています

この時母は、もっと頑張れとか  
あるいは、もう諦めて別の道を選べばとか  
そういうことではなくて  
ただ一言こう言いました  
「迷った時には自分の心が温かいと感じる方を選びなさい」

「迷った時には自分の心が温かいと感じる方を選びなさい」  
そう言ってくれたんですね

この時私は自分の心に問いかけてみました  
あの辛い受験勉強をもう一回頑張れるだろうか  
そこまでして弁護士になりたい思いがあるだろうか  
問いかけてみました  
そうするとやっぱり弁護士になって  
誰かのために働いて  
そんな姿を想像すると  
なんだかまだワクワクするようなね  
そんな思いがあって  
心が温かく感じました  
だからもう一回頑張ってみようと思ってね  
机に向き直って勉強を始めることができました

この言葉をかけてくれた母は、8年ほど前に亡くなってしまって  
母が生きてる間に、この言葉の意味について直接、話をするきっかけはなかったんですが  
今になって考えてみると  
迷っている私に対して  
母としては  
何かに迷った時には、損か得かとか  
あるいは人からどう思われるかとか  
そんなことではなくて  
自分の心が何を欲しているのか  
自分の心が何を求めているのか  
それだけに素直に生きればいいんだよ  
そう言いたかったのではないかなと思います



学生の皆さんは多分これから先  
就職とか進学とかね  
いろいろ悩むことがあるんじゃないかなと思います  
そんな時には  
この母の言葉がひとつのヒントになるかもしれません  
何かそのことを考えるとワクワクするとか  
ドキドキするとか  
優しい気持ちになれるとか  
そんな風な、なんかあったかい感じがするものがあったとすれば  
それが皆さんに向いてる道なのかなと私は思います

### 人生に正解

一つの正解って多分ないと思いますけども  
自分が向いてることって、自分がちゃんとわかっていて  
むしろ自分にしかわからないのかなって思います  
だから、皆さんも、何かに迷った時にはね  
心が温かいと感ずる方を選んで、生きてって欲しいな  
そんな風に思うんですね

で私もその時、まだちょっと温かく感じましたので  
受験勉強、始めましてですね  
それから一回大学院に入って、二年ほど勉強して、五回目の受験  
五回目の受験でようやく司法試験に合格いたしました

あれは確か 2006 年の 9 月 21 日の出来事でしたね  
これはとても晴れた、天気の良い 1 日でしたけれども  
夕方の 4 時  
法務省の掲示板に一斉に司法試験の合格者の受験番号が張り出されます  
私もこの時自分の受験票を握りしめて  
法務省の掲示板の前に行きました  
もっとも自分で掲示板を確認することはできませんので  
近くにいたガードマンに受験票を手渡して  
「この番号ありますか」と言って見てもらったんです

するとガードマンはこうじっと見てね  
「ありました、おめでとう」と言って、おっきな声で叫んでくれました  
この時は本当に嬉しくて  
それまで私のほぼ丸々10年を費やしてね  
頑張ってきた  
司法試験にようやく合格することができた  
まあそんな瞬間で、思わずまた涙が出てきてしまったのですが  
この時の涙はとても温かい、充実感のある良い涙だったなど覚えています

まあこんな風にして、長かった受験生生活がようやく終わったわけですが  
私はこの十年間の受験生生活を振り返ってみると  
あることに気がつきました  
それはこういうことなんですね

夢や希望や目標を持って進んでいくと  
必ずもうだめだと思う瞬間がある  
だけどそんな風に、もうだめだと思ったら  
そこは夢や希望に一番近づいた瞬間なのだっていうことです

私も四回目の司法試験の受験で失敗した時にはね  
もうだめだと思いました  
だけど実は、私の実力というのはですね  
私の合格の一步すれすれ  
一步直前まで多分きていたんだと思います  
そこであきらめないで一步踏み出すことができたからこそ  
こうして今、皆さんの前で話をする事ができているんだと思いますけれども

大抵、希望とかね目標を持って進んでいくと  
もうだめだと思う瞬間がありますが  
もうだめだと思ったら、むしろもうだめだと思えたら  
そこはもうゴールの一步手前なんだ  
そんな風に思って一步を踏み出して欲しいな  
そう思います

私はこのことを父親からも学んだような気がいたします  
私の父はとても山が大好きで  
子供の頃からよくいろんな山に連れて行ってくれました  
であるとき山登りをしながらこんな話をしてくれましたね

「山ってというのは、登り始めは山頂の景色がくっきり見えて  
あそこまで登っていけばいいんだなと元気が出てくる  
だけど山頂の直前までくると  
山頂の景色が見えなくなってしまっ、とても不安になるんだ  
このまま登って行って山頂にたどり着けるんだろうかと不安になるんだ  
だけどそんな風に  
山頂の景色が見えなくて不安になったら、もうそこは山頂の一步手前なんだよ」  
そんな話をしてくれました

よく人生とね、山登りって似たようなものだということがありますけれども  
人生もそんなところがあって  
不安になったり、もうだめだと思ったら  
実はそこがゴールの一步手前なんだ  
ぜひそのことをね、皆さんにお伝えしたいなと思います

ここまで私の仕事のことですとか  
私の生き立ちのことについて聞いていただきました  
最後にですね  
私が子供達に伝えたいこと、というのを書いてみました

これは実は皆さんにもお伝えしたいことでもあるんですけども  
我が家は、両親ともね  
私も妻も両方とも全盲の障害を持っていて  
これから先、子供達にはいろんな苦労をかけるかもしれないし  
他の家庭では経験しなくて済んだような葛藤を経験させてしまうかもしれない  
だけれど  
私たちだからこそ、教えてあげられることがあるのではないかと  
そう思っています

それは人生に立ちはだかる困難から逃げないで  
それとうまく付き合っていく姿勢だと思うんですね

子供達もこれから  
人生のいろんな局面で壁にぶつかって悩むことがあるかもしれない  
そんな時には  
だから無理だ、できない理由を探すのではなくて  
じゃあどうするか、そんな風にできる方法を探すと  
それまで思ってもみなかった、新たな地平が目の前に広がって行って  
人生は俄然面白くなるんだ  
私はそう思っています

何かに壁にぶつかった時にできない理由っていうのを探すと  
多分それは簡単に見つかります  
だけれど  
その時一歩踏みとどまって、できる方法を探してみる  
そうするとですね  
まあ人生って面白いもので、それも必ず見つかるんですよ

そんな風にね、皆さんも何か壁にぶつかった時には  
だから無理だ、というできない理由じゃなくて  
じゃあどうするか、そんな風にできる方法を探していく  
そしてさらに面白い人生を歩んでいていただきたいな  
そんな願いを込めまして私の講演を終えたいと思います  
ご清聴、本当にありがとうございました

～拍手～